

AQUA

ここは富水 すどう美術館の新しい活動の場
 こんこんと水が湧くようにアートも汲めども尽きない希望が湧いてくる
 水はわたしたちになくってはならないもの「AQUA」が誕生する

2011年9月発行 24号 すどう美術館
 〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内 373
 TEL.0465-36-0740 FAX.0465-36-0739
<http://homepage3.nifty.com/sudouart/>

被災者と芸術活動

朝比奈 賢

東日本げんきアートプロジェクトのメンバー5名で、8月15日から4日間、岩手県の大槌町と山田町を訪れました。どちらの町も津波の被害は甚大で、まるで、戦争で破壊し尽くされたように、見渡すかぎり何も無い焼け野原のような光景が広がっていました。初めてこの地を訪れたのは震災前のお正月のことでした。あの楽しい時間を過ごした松井さんのお宅も、コンクリートの礎石だけを残して根こそぎ流されていました。目も眩むような落差です。震災から5ヶ月、自衛隊の活動もあって瓦礫の撤去はかなり進んでおり、表面上は落ち着きを取り戻しているようにも見えます。しかし、巨大津波に当たり前の日常を奪われた人々は誰も深く傷ついているように見受けられ、物心共の復興には大変な時間が掛かりそうです。

山田町・生涯学習課の小成勝也さんによりますと、被災状況には地域差があり、さらに個人差もあって、落ち込みが激しいひともしれば、そろそろ何かやりたいという意欲

が戻ってきているひともしるとのこと。そして、芸術活動を必要としているのは、その中間の、何かきっかけがあれば立ち直れそうな方々だそうです。震災以来、未曾有の被害への対応に忙殺され、民謡や踊りなどのイベントがあってもなかなか参加する気になれなかったのも当然でしょう。しかし、思い切って出てみると、必ず、「よかった、よかった…」と口を揃えて喜ばれるとのこと。少しでもいいから何か別のことに没頭し、「ゆるみ」の時間を持つことができれば、緊張しきった心が大きく回復するようです。

ボランティアが企画したイベントや祭りに参加するさまざまな町民をみてきた小成さんの感想がとても印象に残りました。「被災者の方々は、芸術活動に飢えています。私たちは、皆さんが少しでも元気が取り戻せるよう、アート・音楽のプロジェクトを現地の皆さんと連絡を取りつつ、しかし、決して無理強いることのないスタンスで企画していきたいと思ひます。

東日本げんきアートプロジェクト

(被災地実情調査および行政との打ち合わせ)

すどう美術館館長須藤一郎
 八月十五日(月)から十八日(木)まで岩手県の山田町、大槌町を中心に三月十一日の大震災の被災地に
 行ってきました。被災地で美術作品の展示やワークショップ、演奏家のコンサートなどを行ない、芸術を通じて被災された人たちの心に、生きる勇気と希望をお届けする一活動を実行するための、事前の調査と被災地の行政側の対応などを確認するの目的です。

岩手県を選んだのは大槌町や山田町の被害が大きかったこと、関係者が被災者になっていたりしたことなどで、とに角そこへ行ってみることにしたのです。

同行者は四人のプロジェクトメンバーでしたが、他に現地で「まごの法」人復興岩手大槌町理事長就任予定の松井憲一さんと合流、被災地の現状についてのご説明をいただきとにも、案内役も引き受けていただきました。

震災後五か月経ったのに、特に大槌ではまだまだ瓦礫の山でしたし、山田のほか、足を伸ばして見た釜石、

宮古の街もそれぞれ差はあるにしても、被災の大きな爪あとが残っていて、テレビ等で見ているのと違う衝撃を受けました。

行政の方とお会いしたのは山田町と大槌町でしたが、いずれも生涯学習課が文化関係の担当で、前者は小成勝也社会教育主事、後者は佐々木健課長が応対してくれました。

いずれも被災地での美術や音楽等による支援について、その必要性を痛感されており、ぜひお願いしたい、(ウエルカム)ということ、正式な提案書の提出を依頼されました。時期については現地の状況から来年四月ごろになりそうです。

大槌では他に、町議会の議員さん、ボランティア活動をされている方、被災者の方、被災を免れた方などにもお会いし、災害の状況や復興への思いなどもお聞きすることができました。

幼稚園や保育園の子どもに渡すことができました。

今回の訪問は、被災地の実情がいろいろわかり、これからの活動を行なううえで大きな意味があったと思っています。

点描

こんな話でよかったら (11) 仙仁司

童画のこと 深澤省三のこと

45年前、大学の講義でデッサンの手ほどきをしてくださったのが「赤い鳥」(鈴木三重吉主宰、大正7年発行)の挿画家深澤省三さん(1899~2003)であった。深澤さんについては何も知らないまま石神井公園近くのアトリエに伺い色々と見聞きをしているうちに戦前戦後を通じて多くの絵本や雑誌などに筆を執っていられることを知った。手元に保存されている原画を拝見することが出来た。そして驚嘆としか言いようのない感動に襲われた。卓越した素描力、美しい色遣い、小気味のいいリズム、大胆な誇張を感じさせない実在感、モデルの多様な表情など童画の原画として押入れに仕舞っておいてはならない絵画作品に他ならなかった。大変なものを見てしまった興奮が沸々と湧いてきた。

さてさてその後、何度もアトリエを訪ねることになったが、童画は生活のための副業であって油絵画家としての立場を崩すことはなかった。それでも50年間以上も技術の全てを傾注してきた童画世界は深澤さんの画歴にとって決して欠くことの出来ない表現世界として考えるべきであることとを何度となく進言し、「深澤省三童画の世界五十年」(昭和63年)を実現させることができた。「赤い鳥」、「岩手日報」、「キンダーブック」、「子供之友」などに掲載された童画の原稿など約500点を展示することができたが、初日、深澤さんは会場に入るなり千変万化の表現に、いきなり「これって誰の作品!」と言ってみんなを笑わせると「上手いもんだネ〜!」と発して静かに見入られてしまった。

これで童画も芸術になったと確信できた。

白いノート 5

個展に思う

すどう美術館の仕事と同じように私にとって大切なことは、作品をつくることだ。美術館の仕事と作品制作は、自分の中で対極にあるが、その両方があってバランスがとれているように感じている。

今年は、8月末からの個展の制作時期と、美術館の仕事が忙しい時期とが重なり、時間をいかに工夫して作るか、あらためて考えさせられた。そんな時、ある芸術家の「制作していない時間の過ごし方が大切」という言葉を思い出していた。日々の全てが作品につながる、ということだ。いつもそういう意識を持っていれば、作っていない時間も制作のための蓄積となるのだと思った。

自分の作品が展示されたすどう美術館は、作品を制作する内へ向かう自分と、美術館の仕事をする外へ向かう自分とが、1つの場所で交錯するような不思議な感覚だった。そして、ここで出会う作品やいろいろな人との交流が、制作していく大きなエネルギーになっていることを、あらためて実感した。美術館の仕事と作品制作、お互いがプラスになるように、日々取り組んでいきたいと思っています。

高橋玉恵



